

## ハラスメントで愛する人を失った遺族の思い

伊佐間佳子(過労死家族の会)

私の部屋に小さなピンク色の家の形をした止まったままの時計があります。時計が指している時間は、娘の命が消えてしまった時間です。

娘は今から8年前の6月21日早朝、当時住んでいた社宅の10階屋上部分から飛び降りました。遺書も書かず、私たちに何も残さず逝ってしまいました。

亡くなった原因は会社内での「パワハラ」「いじめ」と「仕事上の過度のストレス」でした。

入社3か月を過ぎた頃から始まり、亡くなる直前まで続いた「いじめ」「嫌がらせ」を裁判が終わった今も私は許していません。

娘がこの会社を選んだのは、「卒業生、皆楽しく仕事をしている」と募集要項に書いてあった事が一番の理由でした。入社式後、「お母さん、色々覚える事沢山あるけど、私頑張るからね」「お給料貯めたら美味しいものごちそうするからね」と満面の笑みで話していた娘の顔が思い出されます。娘の死後解った事ですが、この会社では高卒の新入社員が何人も短期間で辞めていたのです。その原因が「パワハラ」「いじめ」と解っているにも関わらず、会社側はその異常な事態を何ら改善策も講じないまま、新たな社員の採用を続けていました。娘と一緒に入社した同級生も「いじめ」が原因で入社後4か月で退職しています。

娘への「いじめ」は同級生が退職したり、他の「いじめ」対象だった社員が別会社へ出向になったりしたことでひどくなっていきました。

この会社は「嫌がらせ」をしている人間には何もせず知らん顔をし、「嫌がらせ」を受けている人に対しては子会社への出向や事務職から作業工場への異動、挙句には退職させるというひどい扱いをしていました。このようなことを娘は目の当たりにしていたので先輩女性から何をされてもじっと我慢していたようですが、そのうち娘に対する「いじめ」はその場での嫌がらせではなく、外から見えない部屋へ呼びだされ叱責や暴言を受けるようになっていきました。対外は年長者の2人の女性だけでしたが、時には仲が良かったと思っていた先輩も加わり4人で娘を囲んでいたこともあったようです。その部屋には別会社から出向していた男性社員がいたのですが、その方に「それはパワハラになるよ」と言われても、先輩女性はやめようとはしませんでした。

亡くなる数か月前に言い渡された部署異動は娘を追い込んでいきました。派遣で来ていた方がこれ以上この会社にいられないと退職することになりその後任として異動させられたのですが、異動の引継ぎ期間も短い中で、何もかも知っている先輩女性から今までやっていた仕事のマニュアル作成を命令されたり、元部署が忙しければ引継ぎ中でも元の仕事もやらされたりと本当に大変そうでした。その上引継ぎが終わりかけた時、突然取引先のシステム変更があり、今まで教えてもらった事の大半が意味のないものになってしまいました。それから数日後に前任者が退職してしまうため娘はとても不安そうでした。前任者は取締役、そして一番の年長者の女性に「この仕事は一人では大変なので、誰か補助をつけてあげて欲しい」といったそうですが、取締役はそれを無視、先輩女性は「手伝うつもりも、教えるつもりも無い」と言い放ったそうです。

娘はそれでも自分が任されたのだからと頑張っていたのですが、やはり時々ミスがあったようです。ミスがあると事務室内で執拗に先輩女性から指摘を受けていた様子を見ていた男性社員も増員をと上司にかけあってくれたそうなのですが、会社は頑として1人でやらせる方針を変えようとはしませんでした。その上、先輩女性は翌日でも済むような仕事でも娘の帰宅時間を見計らったように家に着くなり電話をかけてきて、会社へ戻ってやらせました。

定時に帰ってきているわけではなかったのも、遅くなると会社の周りは人気が無いので、数回でしたが私が車で会社へ送って行き、仕事を終わるのを待っていました。

そんな事が続いていたので、何度か「こんな会社辞めた方がいい」と娘に言いましたが、娘は「大変だけど、大丈夫だよ。それに何で私が辞めなきゃいけないの?」と返してくるばかりでした。

亡くなる2日前の6月19日台風4号が名古屋に上陸するとの情報が入り女子事務員に帰宅命令が出ました。翌日は会社が休みだった為、仕事を終わらせたかった娘は「もう少し残りたい」と伝えたそうですが、聞き入れてもらえず帰る事になりました。その時のメールのやり取りで「何もよかない。休み明けめっちゃ早く出ていかなかん。」と珍しく怒っている様子でした。翌日の休みには、自分の為にと郵便局で積み立て型の保険に加入し、その後私も休みを取っていたので、一緒に買い物にしたりカラオケに行ったり、食事をしたりと楽しい時間を過ごしていたのですが、その夜の10時30過ぎかかってきた1本の電話が娘を追い込む事になりました。内容は19日に残した仕事の事だったようでした。部屋で電話を受け、終わって居間に来た娘は黙って私に背を向けて座りました。パソコンを触っていた私が何を言っ

でも返事が無いため、娘の方を見ると肩が小刻みに震えていました。私は娘を抱き寄せ「どうしたの？仕事の事で何か言われたの？」と聞くとただ頷くだけでした。娘に「もう会社辞めなさい。明日お母さんも休みを取るから、行かなくていいよ」と言ったのですが、こんなに辛そうに涙を流していても「お母さん、大丈夫、大丈夫だから」と言いました。

この後、娘は電話で言われた事がとても気になっていたのでしょう、かけてきた先輩へ電話を入れています。しかしこの時の電話が娘に死ぬ事を選ばすきっかけになってしまったと今でも思っています。

娘の死後、裁判をと考えていたのですが、主人の職場の弁護士に相談に行けば「無理」と言われ、ある団体に弁護士を紹介して欲しいと頼めば「紹介なんて出来ない」と言われどうして良いのかわからなくなっていた時、娘の事件が刑事事件にならないのかと愛知県警に電話相談をした際、「法テラス」のフリーダイヤルを教えて下さいました。「名古屋に労働問題に強い弁護士がいますよ」と教えて頂き、今日ご登壇されている水野幹男弁護士に出会う事が出来ました。水野弁護士に出会えた事で、「パワハラ」に重点を置かれている岡村晴美弁護士も紹介して頂き、労災は半年で認定されました。

労災が認定されれば国からは是正勧告が出て会社も先輩女性も自分達の非を認めるだろうと思っていたのですが、労災認定されても会社へ是正勧告など一切無いため、民事裁判をおこしましたが、簡単に認めて頂く事は出来ませんでした。しかし控訴審では、粥川医師にもご協力いただき、良い判決を頂く事が出来ました。あろうことか加害者側が上告をしたためそれから約1年の間、何もする事が出来ずにただ最高裁からの判断を待つだけの日々を過ごしました。最高裁への上告受理申立が最高裁で棄却され2018年11月13日名古屋高裁の勝訴判決が確定しました。

しかし無事裁判が終わっても娘は私の元には戻りません。家族が笑って過ごしていた日々も失くしてしまいました。

ハラスメントをする人は必ずその行為を「指導」と言います。しかし人をうつ病や自殺に追い込む行為は決して「指導」などではありません。ハラスメントをする人の口から出る言葉は形は見えませんが先が鋭く尖ったナイフと一緒にです。その尖ったナイフは人の心をえぐりな

がら刺し続けていき、自由に動くことが出来なくなってもまだ刺し続け、終いには、この苦しみから抜け出そうと死ぬ事を選択させてしまうのです。

しかし、この見えないナイフで刺されている人は周りの人に決して自分の弱いところを見せませず、必ず「頑張る」「大丈夫」というのです。

この「頑張る」「大丈夫」はハラスメントを受けている人の心の叫びだと思います。この言葉が出たらすでに赤信号だと思って下さい。

私はパワハラは殺人と一緒にだと思っています。

今、全国で行われている労働裁判の半数はハラスメントによるものでは無いでしょうか？

長時間労働による過労死を無くすための活動は今まで活発に行われてきましたが、ハラスメントによる過労自殺の防止活動はどうでしょうか？

コロナのお陰であまり報道されていない「ハラスメント防止法」は本当に職場のいじめ・ハラスメントを無くすためのものなののでしょうか？中途半端な法律で本当に労働者を守れるのでしょうか？

優しく素直な若者がこれ以上、人の醜い行いで命を失くすことが無くなるよう願うばかりです。